

第7章 市場の広がりとは貨幣

1. 貨幣の歴史

お金、貨幣とはなんだろうか。一見、誰でも知っていることであるが、よく考えてみると難しい問いでもある。飢えた人が食べ物を欲するように、人が貨幣を欲しがるとしたらそれはなぜだろうか。貨幣は、なぜ誕生したのだろうか。人が一般的に考えそうな理由として、貨幣を持っていれば、それでいろいろなものと交換できるから、食べ物が欲しいときには、食料と交換できるからということだろう。また、いつでも交換できるということであれば、交換するときまで、その交換できる価値を保存しておけるという特徴も備わっている。貨幣の価値が定まってくると、魚1匹が貨幣換算でいくらというように、魚の価値を貨幣で計ることもできるようになり、魚1匹とおにぎり1個とを貨幣の価格で比較することもできるようになる。誰かに仕事などを助けてもらったとき、そのお礼として、その何とでも交換できる貨幣を労働の対価として渡すことも可能となる。そうすると、支配者も、労働で奉仕する夫役ではなく貨幣での支払いを欲するようになるだろう。いわゆる代銭納化である。

ここで登場する貨幣は、貨幣の役割を誰もが認識して、合意の上で使用しているものである。つまり、貨幣は、**通貨（流通貨幣）**として認められたことになる。しかし、この貨幣そのものに誰もが交換を認める実質価値がない場合には、少しややこしいことになる。貨幣は交換の必要性から生まれたというようなわかりやすい見解は、現在、研究者によって否定されてもいる。それゆえ、貨幣の成立の議論や貨幣の定義もさまざまである。このような難しい問題を秘めている貨幣について、まず最初にわたしたちが利用してきた貨幣の歴史を振り返ることから始めたい。

歴史を紐解いてゆくと、現在でいうところの貨幣の役割を果たしたものに、

タカラ貝がある。タカラ貝は、紀元前 6000 年から紀元前 5000 年に存在したゾエトウン文化の遺跡（現トルクメニスタン）から連なったものが発掘され、アッシリア帝国のテル・アパラチアからは紀元前 5600 年から紀元前 5200 年頃の製作とされるタカラ貝の首飾りが出土している。古代中国でも、紀元前 3300 年から紀元前 2100 年頃に存続した馬家窯文化期の墳墓からタカラ貝が発見されている。これらのタカラ貝は、希少性のために最初は貨幣の役割を果たさず、宝飾品や価値のある財、また、**威信財**と見なされていたらしい。タカラ貝は、西周（紀元前 11 世紀中頃から前 771 年）の末期から、物の価値を計る尺度として利用されるようになり、タカラ貝そのものの貨幣化や銅製で貝の形をした**銅貝**が貨幣として流通するようになったと推察されている。春秋戦国時代（紀元前 770 から前 221）には、貨幣が多様化し、黄金や銭、布、帛^{はく}などが代用的な貨幣として利用されるようになった。しかし、**貝貨**は古代の時代に利用されただけの貨幣ではなかった。その後、実に 20 世紀に至るまで利用されていた貨幣なのである。たとえば、マルコ・ポーロ（1254?-1324）の旅行記である『世界の記述』（『東方見聞録』）には、カラジャン地方（現：雲南）の首都ヤチ（現：昆明）では、白いタカラ貝がお金として使われていることが記されている。タカラ貝の価値は、80 個で銀 1 サジュであり、それは 2 ヴェネツィアグロスに値するという。なお、純銀 8 サジュは純金 1 サジュに換算される。ヤチから西方にある王国の首市カラジャンでもタカラ貝が貨幣に用いられていた。この貝はインドからもたらされると述べられている（高田英樹訳『世界の記』 p. 283）。

16 世紀末には、フィリッポ・ピガフェッタ（1533-1604）が、アフリカのコンゴ王国の話として、「この地方において価値を持ち貨幣として利用されるのが、金でも、銀でもなくて、巻貝である。」（河島英昭訳「コンゴ王国記」第 1 書第 4 章『ヨーロッパと大西洋』 pp. 372-373）と述べ、それはコンゴ王国だけでなく近隣のエチオピアでも、アフリカのどこでも、中国の諸地域やインドのいくつかの地方でも、金、銀、銅、あるいはこれらの合金によらない貨幣が用いられる事実を紹介している（河島英昭訳 同、 pp. 375-376）。アフリカでは、17・18 世紀のダホメ王国でも貝の貨幣としての利用が見られる。ミクロネシアのヤップ島では、後述するバラオから持ち込まれた**フェイ**（石貨）と呼ばれる大きな円盤状

の石が貨幣としての役割を果たしており、現代の人たちの注目を引いたが、同時に貝もまた少額の貨幣として利用されていた事実がある。これらの記録から、わたしたちは、タカラ貝が古代・中世を通じて、実に現代まで世界の各国で貨幣として利用されてきたことを確認できる。タカラ貝を貨幣とするのは、ヨーロッパを除けば世界的に普遍的な現象であったのである。

カール・ポランニー（1886-1964）は、このような貝貨の使われ方に注目し、通貨としてのタカラ貝の金に対する優位性として、およそ以下のような点を指摘している。まず、金は重さで測ったりしなければならぬが、タカラ貝は、目で見て1つが1単位であり、しかも、その単位は金に比べて微量である。よって、誰でも手に入れられるような食物を購入できる。金の場合、たとえ、砂金であっても高価であるので、取引には不利である。タカラ貝は、模造されにくい。金貨のように青銅粉をまぜて品位が落とされたり、切られたりすることがない。きれいで錆びず、光ったままの乳白色は変わらない。といった具合である（栗本慎一郎・端信行訳『経済と文明』 pp. 296-298）。

現在の日本でわたしたちがイメージする貨幣といえば、古代から使用されてきた金や銀で製造された硬貨だったり、政府が発行した紙幣であったりするだろう。しかしながら、世界の歴史を見てゆくと貴金属製でない貨幣が、交換や対価の支払い手段として利用されていたことがわかるのである。

アメリカ大陸については、ホセ・デ・アコスタ（1540-1600）が1590年に公刊した彼の『新大陸自然文化史』において、アメリカの原住民が、金や銀を貨幣として使用していなかったことを克明に記している。少し長いが引用して紹介したい。

「既に言われているがごとく、インディオは、金、銀、他の金属であっても、貨幣として用いたり、物の値段として用いたりすることはなく、彼らは装飾にのみそれを用いた。彼らは、何千もの金や銀の器を神殿や宮殿、大墳墓に保持していた。彼らは取引や購買のためのお金を持たなかったが、昔のように他の人と物を交換していた。ホメロスが指摘し、プリニウスが語っているように、お金の代わりに値段を決定するものがいくつか

あり、この習慣は今日までインディオの間で続いている。メキシコの諸地方では、彼らはお金の代わりに果実の一つであるカカオを使用し、これと望む物を交換する。ペルーでは、ココアが同様に利用される。ココアはインディオがとても大切にしている葉である。パラグアイでは、彼らは、鉄の刻印を、サンタ・クルス・デ・シエラでは、織布を貨幣として使用する。最後に、インディオの取引方法、つまり、彼らの売り買いは、物と物とを交換することであり、とても大きな市が頻繁に開かれていたことで、お金や仲介する人も物も彼らには必要なかった。なぜなら、彼らは、ある物がどれだけの価値があるかをよく知っていたからである。スペイン人が来てから、インディオたちも金と銀を使って購入をするようになった。初めのうちは、貨幣はなく、古代ローマ人が言っているように銀の重さが値段をあらわしていた。その後、利便性を高めるため、メキシコとペルーで貨幣が製造され、今日に至るまで、西インドアスにおいては、銅やその他の金属ではなく、銀と金だけがお金として利用された。」

(Padre Joseph de Acosta, *Historia natural y moral de las Indias en que se tratan las cosas notables del cielo, y elementos, metales, plantas, y animals dellas, y los ritos, y ceremonias, leyes y gouierno y guerras de los Indios*. Impreso en Seuilla: en casa de Iuan de Leon, 1590. pag. 198-199.)

貨幣の代わりに、カカオやココア、織布を利用しており、場合によっては、物々交換によって取引をしていたことがわかる記述である。実は、古代の日本でも、米や塩、布などが貨幣の代わりに使用されていた。交換の媒介物と認められれば、これらのものは、貨幣の代用、実際には貨幣としての役割を果たしていたのである。物々交換での問題は、自分の欲しい財を所有する相手が常に自分が提供可能な財を欲するかどうか、ということである。

古代メソポタミアでは、粘土製の板が交換の媒介物となっていたことがわかっている。この粘土板に記された文言の通りに、粘土板と対象物の取引がおこなわれるのである。たとえば、粘土板には、「これを持参した者に大麦をどれ

くらい渡す」という内容が記されている。一種の引換券のようにも見えるが、いわば、支払いを受ける権利が付与された**代用貨幣**=トークンである。このような例は古代エジプトにもあり、パピルスに支払いの内容が記され、このパピルスが代用貨幣として通用したと考えられている。先に挙げたマルコ・ポーロの『世界の記述』は、カンバルク（現在の北京）では、桑の木の皮から**紙幣**を作り、統治しているすべての国で利用させていること、ガインドウ（建都、今の四川省西昌県）では、金の延べ棒を貨幣として利用し、重さで価値を決めていること、少額貨幣として、塩を煮て型取りしたものが使われていることを紹介している。貨幣は実にさまざまである。

さて、ここからは金属貨幣の歴史を探ってみたい。まず、銅でできた貨幣から見てゆこう。銅銭は、春秋戦国時代（BC770-BC221）の齊や燕、趙などで使われた刀の形をした刀貨、また、韓、魏、趙で使用された鋤の形をしている布銭（銅でできている）、さらに、周、秦、魏、趙で使用された円形の円銭が確認されている。円銭は、丸い穴を持つ円孔円銭（環銭ともいわれる）や四角い穴が

図表 7-1 中国の銭貨



出所：日本銀行金融研究所貨幣博物館 HP